

National Institute of Multimedia Education

NIME International Symposium 2007

独立行政法人メディア教育開発センター国際シンポジウム 2007

高等教育における教員の ICT 活用における教育力向上に向けて

去る平成19年 10 月 17 日に開催された上記タイトルのシンポジウムに FD 研修の一環として参加してきましたので報告いたします。全国の教育機関から合計 205 名の参加がありました。正直な感想を述べますと、初耳の略語等が出てきて具体的な内容については理解できないことが沢山ありました。ただ、こういう世界があって、教育の開発に真剣に取り組んでいる方々が沢山いらっしゃるということが実感出来ました。また諸外国では教員に対する評価が日本より遙かに厳しく行われていることを実感しました。以下に簡単にシンポジウムの概要を報告させていただきます。NIME の理事長によれば、このシンポジウムの内容をまとめて後日各大学に配布予定だということなので、詳細はそれを参照いただいた方が良いかと思います。二つのセッションがあり、講演者の方々の話が終了後、会場からの質問に基づいた討論がありましたので、その部分の内容を主に紹介します。ただ、同時通訳はされていましたが、聞き取れなかった部分や意味不明の部分も沢山ありましたことをご承知いただきますようお願いいたします。

**開会挨拶** 10:00～10:30

- ・文部科学省 土屋 審議官
- ・NIME 理事長 清水康敬

**基調講演** 10:30～11:30

バージニア工科大学 副学長 Anne H. Moore 先生

タイトル 新たなテクノロジーと新たな学習: 教員、学生、組織の変容

**セッション 1** 13:00～15:15

司会者 NIME 准教授 青木 先生

諸外国における教員の ICT 活用による教育力向上に向けての教員への支援に関する取り組み

各高等教育機関における FD 関連センターの設置や教授法に関するガイドラインの策定、FD 研修・ワークショップの開催等、組織としての教員への支援の取り組みと ICT 活用について議論を行う。

上記テーマに沿って以下の4人の方々がそれぞれの組織における取り組みについて講演され、最後に会場からの質問用紙に基づいてパネルディスカッションが行われた。

- ・教授・学習を向上させるための革新的なコミュニケーションテクノロジーリゾリューションの推進

Peggy Benton (Professor, Instructional Technologies, San Francisco State)

University , USA)

•英国の高等教育教授法の向上と支援のための戦略

Jay Dempster (Deputy Director, Center for Academic and Professional Development, University of Warwick, UK)

•ICT 活用のための研究主導の FD

Keith Trigwell (Professor/Director, Institute for Teaching and Learning, University of Sydney, Australia)

•FD 新次元におけ ICT 活用法

Terumasa Ikeda (Professor, Faculty of Humanity, Meijo University, Japan)

## 会場からの質問と答え

Jay Dempster 教授への質問

質問 1

国レベルの支援としてどのようなサポートをすればよいか？

答え

スコットランド、イングランド、北アイルランド、ウェールズ各地域の大学が共通の資金のサポートを受けられるようになっている。

Keith Trigwell 教授への質問

ディープアプローチを英国、オーストラリアで実施した場合違いはありましたか？日本の学生は諸外国の学生より消極的ですが、ディープアプローチを日本で導入する場合のアドバイスをお願いします。

答え

このような考えを導入するのは非常に難しいです。ディープアプローチは中国人ではうまくいかないんです。中国でわかったのは、中国の学生は記憶というところをやったんですが、リハーサルで本当に記憶に近い様なプロセスをやるわけです。でもこのプロセスをやるたびに学生はそれをこっちの方法で見ている。中国のことわざで、100 回言えば毎回違うイメージということわざがあるようですが、これは録画的才があると思うんです。この研究はうまくいく国もありますし、いかない国もあるようです。それからまた、学校的な違いもあるようです。理系の学生は人文学の学生とまた違うというようなこともあります。あるいは化学の学生が記憶と言うようなところを大いに使うという様な部分もあるかもしれません。ですので、鍵となるのは学生の意図が何であるかを見いだすことです。学生にして欲しいと望むことと、実際にやっていることが違う。あるいは学生にもっとこのディープアプローチを採用してもらいたいと、そして理解と言うことにもっと参加して欲しいと思うのか。先ほどその成果というものを見ましたが、それをやると学生はよりそのテーマを覚えておく期間が長くなるんですね。ディープアプローチをとると。ですのでこの質問にお答えするにはこの導入の方法ですが、これは教員に聞いてそして学生に相談をしてもらって話し合ってもらって、そしてその教授の文脈の中で考えてもらうということになります。そしてそれに応じて競争していくということになります。そして学生と話しをすることによって教員の意図、実際の学生の行っていること、中等高等学校から表面的なアプローチを取ってきたことが良しとされてきたかもしれないです。で

すので、その場合大学においてまた別のことを求めると言うことになりかねませんから。ですから、私の同僚が言いましたが、コミュニケーションに参加してもらうと言うことです。

## 質問2

PBL (project based learning) を含むコラボラティブでパティシケイティブ？なアプローチが重要であることは理解しています。しかし同時に、深い学習の為には当該科目についての一定量以上の知識が基礎にないと表層的な活動の為の活動に終わってしまう危険があります。参加型学習の中で知識の習得を確保することは言うは易くして行うは難しです。この問題の克服についてコメントをお願いします。

## 答え

私はこの質問に質問で返したいと思います。この PBL の問題は先生の間で競合を生むことになると言うことでしょうか？

いいえ、そう言う言い回しの質問ではなかったのですけれど。今の質問が言わんとしていたことは PBL (project based learning) そしてこの参加型の学習は良いことであるが、それをするために学生は先ず表面的な学習を行って知識をつけてからプロジェクトに携わるあるいは参加する必要があるのではないだろうか。その問題をどう克服するかと言うことです。

## 答え

まあ、そうかもしれません。表面的アプローチを先ずやってからディープに行かねばならないと言うことはないと思います。ですからそのアプローチ、意図するところが違うんです。学生の意図は何であるかということです。もし学生の意図が理解することであればディープアプローチを取っているということになります。そしてその必要な知識をつけて、そして他の分野にも入っていくためには理解するということが意図として必要となります。表面的アプローチで知識だけを記憶して、そして試験に合格してもそれは試験が終わったらその後その知識を使うことが出来ませんから、多くの場合には学生が表面的アプローチを取っていると思う場合でもそうでないことが多いんです。理解したいという意図があればこれはディープアプローチになりますから。ですからこれは問題ではないと思います。多くの人は教員の観点からは表面的アプローチが良くないという場合がありますけれども、学生の場合には文脈の中でそのアプローチとしてそれが目的にかなうことであれば決して悪いことではありませんので、それは状況によりけりだと思います。

## 答え(他のパネラー)

1つ付け加えたいのですが。わたしも PBL はリスクがあると思うんです。教員のガイダンスがなければいけないと思います。生徒と選択的に関わってそしてプロジェクトを開発し、そしてその原則を適応する場合には、やはり形式的な形でその段階毎に評価をしていくことが必要だと思います。そうすることによって学生がちゃんとその解析をしていてそしてそれを合成しそして開発しているかを確認することが必要です。その中で自分たちの評価というスキルが高まってくると思います。そして自分たちの仕事それから他の人たちの仕事に対する優れた批評家になれると思います。

## Terumasa Ikeda 教授への質問

米国、英国、オーストラリアの発表がありましたが、日本の大学で導入すればよりFDが発展すると思われますか？

## 答え

Jay さんや Keith さんのおっしゃっていることは私が実践してきていることであると思いながら聴いておりました。ですから今日はちょっと自信をつけて帰れます。ただし、Jay さんや Keith さんのおっしゃっていることは実践しないと deep understanding にはなりません。これが問題です。表面ではわかるかもしれませんが。そんなアプローチ、考え方でやっているんだなど。だけれどやっぱり自分でその ICT の環境の中で実践して失敗してみないとお二人のやっていることはやっぱりつなぎ合わせられなくなりますね。だから、時間がかかりますけれどやるしかないですね。お二人は間違ったことはおっしゃってないと思います。

## 全員への質問

日本では教育が業績として評価されないことは多いのですが、それは教育の能力を測る指標が明らかではない為だと思います。教育力の指標はイギリスやオーストラリアにはあるのでしょうか？

## Jay Dempster 教授の答え

様々な方法で違うレベルで測ることが出来ます。品質保証として全国レベルで測定することがあります。教育機関あるいは学部として、あるいは個々の教員についても測る基準があります。現在は？が英国で必要ですし、正式な研修を受けなければなりません。そして3年に1回評価されます。国の機関によって一定の教育方法、質のレベルに達していることがそれによって認証されます。様々な尺度があります。ただ官僚主義的に聞こえるかもしれませんが、英国では文化の一部としてやっています。専門家としてやることであるとされています。5年前、10年前はそうだったのですが、その後新たな教員が入ってきてこれは専門家としての環境の中で当然のこととして受け入れられてきました。

## Keith Trigwell 教授の答え

オーストラリアでは主な指標は国レベルで収集されます。学生が卒業した後に収集されます。そして使われている指標というのは話し方の研究に関してですが、4つの要因、これが学生の経験の中で学習のアプローチにディープあるいはさんせつ？と言うようなアプローチに影響をあたえるということです。それが教授の質そして学生の作業の量そして経験、そして学生の評価、そして目標あるいは目的、これを学生が評価すること。これが全てプラスであれば学生のディープアプローチの方が強い。そしてその学習の質が高いということです。その4つの分野これが国レベルの学生のアンケートによって行われ、その結果は全ての大学に公開されます。そして国の予算の割り当てというのはこのスコアによっておこなわれますので、非常に重要な学生の経験に関する調査そして指標になります。

## Peggy Benton 教授の答え

基本的には我々も同じようなアプローチを取っております。Jay さんがおっしゃったのと同じなのですが、彼女もうまく説明してくださったと思いますけれども、同じような印象のサイトの visit もありますし、その教員の評価それからその授業の評価などがございますので、我々は常に他から review されているということです。

## Jay Dempster 教授の答え

英国では全国の学生の調査がありました。これは新しいんですけれども、少し不安を起こしているようです。と言いますのは学生が自分が好きなものに票を投じる訳ですから、すごく効果的なものに票を投

じているわけではありません。でそれはまだ改正する必要があると思います。また、ディープテーブルというものがあまして、トップテンの大学で様々な尺度のマトリックスからなっていてそれを加えていくわけですけれど、レシピを変えるようにマトリックスも変わりますので、大学はそれぞれ違う分野で競争しなければなりません。十分に学習の資料を提供していないという大学は、例えば不得意な分野でももっと良くならなければいけないということなのですが、毎年項目が変わりますので常に違うものを追求していかなければなりません。ただ、何が、教授法や学習法として効果的かと言うことを測っているわけですが、その内容は毎年変わりますから常に優れたものを求めています。

Terumasa Ikeda 教授の答え

私も？には学ばせてもらったんですけども。シンプルに言ってですね、こういう指標が今一番大事ななど思っているのがあります。それは授業の value for money ですね。それを表現する指標は1つ、学生に対して自分の将来に取ってこの授業は役に立つと思うかどうかと言うことです。

## セッション2 15:30～17:45

司会者 NIME 教授 Fujie Yuan

諸外国の高等教育機関におけるICT活用による教育力向上に向けての教育手法の改善に関する取り組み

インスタクショナル・デザイン、LMS や CMS の活用、システムやコンテンツの開発手法、授業評価の手法等、ICT を活用した教育手法の改善についての具体的な取り組みについて議論を行う。

上記テーマに沿って以下の4人の方々がそれぞれの組織における取り組みについて講演され、最後に会場からの質問用紙に基づいてパネルディスカッションが行われた。

- eラーニング実践者のためのFD ニーズ:カナダ・アサバスカ大学からの組織的事例研究  
Heather Kanuka (Associate Professor/Canada Research Chair, The Centre For Distance Education, Athabasca University, Canada)
- 学習と教授におけるICTの融合: 'トレーナー' と 'ユーザー' の経験と視点の組織的事例研究  
Andrew Hannan (Professor, Faculty of Education, University of Plymouth, UK)
- 高等教育におけるブレンデッドラーニングの効果的活用: 韓国淑明女子大学の場合  
Dr Shin (代理): Jae-Kyung Lee (Professor/Director, Center for Teaching and Learning, Sookmyung Women's University; Chair, The Association of Korea CTLs, Korea)
- eティーチングシステムとFDテクノロジーとしてのTIES  
Koichi Nakajima (Professor, Faculty of Economics, Tezukayama University, Japan)

## 会場からの質問と答え

Heather Kanuka 教授への質問

## 質問1 司会者からの質問

カナダのアサバスカ大学の事例ですが、Kanuka 先生は eラーニングコースを開発する時にスケールメリットということがとても大切だと言うことで、それに関してアサバスカの経験を教えていただきたい。スケールメリットにおいてどのような視点からコース開発を行ったのかと言うことです。

## 答え

スケールメリットですが、アサバスカ大学ではかなり他とは違うんです。というのはノンペースシステム？というのを持っておりまして、つまり、カナダにおいては非常に人工が分散しているので、そして地理が、土地が非常に大きいのでアサバスカが設立された時、我々が取った方法というのは個々の学生にどんな時点でもスタートを切ってもらって、そのコースの過程の中で自分たちのペース、自分たちの速度を進めてもらうということをやりました。そして教員というよりはチューターを使ってやったんですが、これが唯一カナダでスケールメリットを測れる方法でありました。そして地方にも到達する唯一の方法だったんです。他のカナダの機関、組織において、スケールメリットとしてよくとる方法は従来はマルチポイントビデオカンファレンシングというのをやっていました。例えば、アルバータ州ではソーシャルワークプログラムがありますが、これがカルガリー大学とアルバータ大学の両方で提供されています。そしてこれはカルガリー大学で運営されていますが、アドミッドン？にマルチポイントビデオで提供されるのです。最近では eラーニングでこれを行えるようになってきています。勿論 WebCT,そしてムードルそしてブラックボードなどがありますが、多くの大学がこのプラットフォームを持っています。そしてここでも過去数年の動きですが、我々は色々な種類の非同期型の技術を統合してきています。しかし、往々にしてこのプログラム、ディスカッションが非常に大きな構成要素なんです。自発的な対話を計る方がこのプログラムにおいてはいいと思います。アサバスカ大学においてはこのノンペースプログラムにおいてはチューターは学生の数に応じて 講習？を受けます。ですので、スケールメリットでは人数は関係ないわけです。しかしこの問題は焦点を当てられていたのはペーパーベースとしての情報伝達にありました。今では通信技術によって様々な学習が統合出来ますので地方にも手をさしのべようという努力を続けております。想像力をはたらかせてクリエイティブにアサバスカ大学ではこのノンペースプログラムを取っていますが、しかし、多くの教員はディスカッションの構成を維持し、そしてスケールメリットも測るためにブログを使い始めています。ウィッキィ、そして最近ではブリッキーを使っています。これらをコースに取り込んでかなり効果を発揮しているようです。

## Shin 先生への質問

先生の発表の中で教育方法を報酬システムの方に導入されたということで、韓国の大学では教員に ICT を活用するところのインセンティブ高めるの必要があったと思いますが、日本では教員の ICT 活用のインセンティブを高めるのに非常に苦労していますけれども、韓国における実践、経験について教えてください。

## 答え

ご質問ありがとうございます。私たちの国そしてドンゴク？大学の例なんですけれども、私たちも同じような問題があったと思います。インセンティブというのは教員にとっては大変重要ですが、IT の開発の初期の段階で大学は教員にミニグラントのようなものを提供して自由に使えるようにするわけです。例えばその講座の改善開発に IT という部分を導入するのに自由に使えるわけなんです。ただこれはあまり成功しませんでした。教員は忙しいので、お金を出すというのはあまり惹き付けなかったようです。しかしその後、大学は教員に対する報酬システムを導入する時にこの講座の評価という項目を入れたんです、

学期が終わるときに学生が講座を評価します。そして評価の項目の中に教授が例えば ICT を使って学習教育を豊にしたかという評価項目を加えたんです。これが重要だったようです。学生の評価の中に ICT の技術が入ったということで重要性が認識されたようです。また、私どもの大学ではティーチングポートフォリオエバリュエーション？という評価方法を使いまして、学期が終わるときに、教員は自分自身の教育法、教授法のポートフォリオをつくらなければいけません。ポートフォリオを作るために証拠が必要なわけです。自分の教育方法を改善する種として証拠を出さなければいけません。そこで現在は教員は IT を使うことに関心を強めています。この二つの制度つまり、評価制度が入ったことと合わせて。また、私の大学では教授方法を重視していますが、例えば金銭的なインセンティブを出すところもありますけれども、評価という動機付けの方がいいようです。教員は学生から評価されると認識されるという方が強い動機付けになるようです。IT を使うことだけでなく、教育方法全体を改善するというインセンティブとなります。また、もう一つ大事な点ですけれども、IT は学生のニーズに応えますけれども、同時に教員も IT を使うニーズがあるはずで。私の場合は、例えば様々な講座があると、私は今、日本に来ていて明日教えられません。ですから、オンラインクラスで学習するように学生に言っておきました。そこで非同期のコミュニケーションアクション？を報告します。Sookmyung の場合はルールを導入してオンラインコースを教室での教育の補完的なものとして活用するようにしました。ですから教員は教室を移動しながら同時にオンラインを提供しています。インセンティブは多様なものができると思います。インセンティブというのは必ずしも金銭的な報酬とは限らないと思います。

#### Hannan 先生への質問

先生のご講演の中で教室の環境整備を行う際には教員のニーズを聞くべきだというお話をされたと思いますが、大学運営側としては教員にインタビューをすると個人的な好き嫌いがあまして、本当に教育の発展に教員の要求が必要なかどうか判断に迷う場合があるのではないかと思います。Plymouth 大学では何を基準として設けていますか？

#### 答え

唯一この教員をこのようなプロセスの中に関与させるというのは集団的に関与させるという意味では個人個人のフィードバックを得ることもできますし、それらを集めることもできると思うんですけど、やはりディスカッションのプロセス、それぞれの科目レベルあるいはプログラムレベルあるいは学部レベルでやるということ、そして常にコンサルテーションをするという継続的なプロセスが必要ではないかと思えます。そうすることによりまして、いろいろな議題などが出てくると思います。一般的な ICT の活用の方向、大学での活用の方向というものがでてくると思います。そうすることによりまして、その教員の声というものが前面に出てくると思います。これは重要だと思います。いろいろ小さなスケールということで中央のサービス、それから周辺でのサービス、それぞれの学部でのサービスによりまして個人個人をサポートする、あるいは、その教員のチームをサポートする。そうすることによって彼らのニーズに応じていく。それはいろんな面があると思うんですけど、やはり新しい技術を適切な状況に応じてやるということ。そして、正しい方向づけをイノベーションに関して求めていくということ、変革に対しての方向づけを求めていくということであります。私の大学の場合におきましては、まだ完璧なレベルにまでは達しておりません。我々はそこからまだ遙かに離れていると思います。ですから私が提唱しているのは実際にこの包括的？ディスカッションに貢献をした人たちのステートメントから守られると思います？。やはりそのアンケートをする場合にも自由回答式のものにする必要があると思います。現在では不満が多いです。意志決定というのが、中央でされてしまう。そしてそれらが強要されているということでもあります。そのコンサルテーシ

ョンの中でそういったものが進化していくよりも押しつけられていると言うことでありますので、私はそういった点を提唱していきたいと思います。

#### Nakajima 先生への質問

同じ講義を何度も見せると言うことになった場合、学生の対面授業への意味づけ、取り組みかたにはどのような変化がありましたか？また、教員の側ではどうでしょうか？それと学生の出席率などへの影響は如何でしょうか？

#### 答え

一つめの質問は、学生は復習ビデオがあれば授業に出てこなくなるのではないかと、それから、真面目に授業中に聴かないのではないのかと言う、多分そういった可能性があるじゃないのかということでご質問されたのではないかと思います。実は最近の学生さんたちは、だいぶ変わってきているようで、そのようなことは殆どあり得ないように思われます。というのは私はだいたいログ？取っていますし、チェックをしています。そもそもすべて例えば私の授業の一つはですね、学校に来なくて良い、こんなこと言うとお叱りを受けるんですが、学校に来なくて良いと言っても日本の学生さんは来るんですね。私の顔を見たいからじゃないとは思いますが。ですから、当然ビデオがあると安心をしているようです。真面目な子じゃないですよ、私の授業を取る子というのは、だいたいそんなに成績も良くもないです。けれども非常に安心しているので、彼らのコメントを見ると要するに授業に集中できるということです。黒板とチョークの授業の一つの問題はノートを取ることが学ぶことであると言ったような思いがずっとあって、前のパネリストでディープラーニングとサーフェスラーニングのことがありましたが、殆どの日本の学生もそうですけれども、サーフェスラーニングで暗記物つまり真面目に先生の黒板をノートに取って暗記して試験にパスすれば良いんだという勉強の仕方にも慣れていきますので、いわゆるもう一つ踏み込んだ自分の頭で自立的に学習するというディープラーニングの方がどうしてもできていない。そういう意味で、この復習ビデオがあるということで、歌ったり踊ったりホームページをのぞきに行ったり、中島がやっているパワーポイントで覚えているやつまたは英語のビデオを見せたりと言うようなものに集中ができると言う風な感触を持っています。それから出席率ですが、教員の反応についてはよくわかりませんが、かなりの数の教員がライブシステムを使っています。その理由はいろいろとあるかとは思いますが、一つがよくわかる理由としては学生がさっき言った大学3年生の頃になりますと就職活動で授業に出てこなくなります。これは皆さん日本の先生がたはご存じだと思います。その子たちが、卒業が近づいてくると？先生単位くださいと言うことになるんですが、ちゃんとビデオを取ってあるから勉強しなさいという、彼らは彼らなりにビデオを見てきます。とりわけ試験の前とか。それから授業を丸ごと自動的に録画されますので、チェックさえしておけばレポートがいつ出ているとか、いろんなことがビデオを見ることでわかりますのでそういう意味で役に立ちます。それからスポーツ関連ですね。スポーツで公欠を取ったりする学生さんにも非常に好評です。それから出席率ですが、したがって昔の学生はなんて言うんですかね授業にろくにでなくて最後の試験だけ受けて合格するような豪傑がたくさんいましたが、今の学生さんは非常に真面目で授業に出てきます。それからやり方によっては非常に勉強をしますので、出席率は良いですね。例えば私はまだ公表してないんですが、経済開発論と言うのがありますが、一回目のオリエンテーションを過ぎた後は落とす学生は殆どいません。ほぼ100%とは行かないまでも90%は出席それから最後まで単位を取りにきます。で、欠席率も非常に少ないです。やり方によってはICTというのは非常に役に立つと思っています。

#### Kanuka 先生への質問

アサバスカ大学では教員調査を行った結果をどのように教員にフィードバックされていますか？調査の結果から更に発展させることができたでしょうか？

答え

サーベイはこれはレポートを書くことでフォローアップをしました。それをオンラインで公表して、そしてemail のリストでもこれを教員にも連絡をしました。これを提出したときに、上級の運営側に提出したときにここで ? フィードバックを行いました。あまりシニアの方はこれに対しての行動をとりませんでした。二つめの質問に対する答えですが、データを使ってFDのサービスの指導としました。ガイダンスとして使いました。ですので、まだそれほどにはニーズとしてはまだない、まだどこで欠落がおこっているのかわからないような段階でこれを行った。そして調査を行っていいフィードバックをニーズに関して得たので、これも先ほど述べたと思いますが、最も重要なフィードバックはこの教育学これが技術を進展させなければいけないということでした。ですので、教員がまだこのテクノロジーを使っていないと、アサバスカでは特にそうであったと。素晴らしい環境があるのにまだ使っていないという問題が明らかになったわけです。今までなかった技術がもうあるということで。ここで重要なのはコメントの中に重要な側面としてすべてのコメントに見られたのが、”私はこれをやりますけれども、でも恩恵が何であるか、生徒への恩恵が何であるかを知りたい”ということでした。それまで我々はこれをどのようになぜこの技術を使うべきかというところを考えていなかったの、このコメントを我々のFDの活動と焦点を変えて、明確にこの技術を使えばこういったことがメリットとしてありますよということを打ち出しました。それから少し足を火につこんだような感じですけども、どのような技術を使うべきだというふうに言ったときに、この技術を強制するのではなく、教育学的価値が無いものは強制しませんでした。ですので、こういった意味でも調査の結果は非常に価値のあるものになりました。もう一つ興味深かった結果ですが、こういう質問をしました。この教育、教授は価値のあるものと思っていますかというふうに聞いたんですが、すべての人がYESと言いました。教員はこういうことを気にしていないと思いがちですけども、私の経験から、これは教員は気にしているんです。ただ、どのように適切にやればいいのかわからないだけなんです。ここで、我々が情報を提供して適切にやれるんだと言うことを教えて、そしてこれを楽しい経験としてもらいたいと思っています。どういふふうに適切にやればいいのかわからないと言うことではなく、その教育の背景がなくどのように教えたらいいかわからないという状況から、間違った方向でやってその理由もわからないと言うことではなくしたいと思っています。そういう意味でも我々が焦点をあて続けられる、いい仕事ができるスキルがあるということがわかった。そしてこの教育学、この技術でもって非常にメリットがあるということがわかっただけで良かったと思います。

Hannan 先生への質問

質問1

教員がサポートを求めているというお話がありましたが、教員が自分の教育力を高める為に求めているサポート、つまりどのようなサポートを教員が必要としているのかを教えてくださいたいと思います。

答え

やはりニーズは状況によって異なっています。教員によっては、技術的にもかなり進んでいる方たちもいます。そして、いろんなアイデアを持っていてそれによりまして大学にあります様々な機械を活用することができます。実際に教員の為の技術者がいるんですけども、皆様方のお手元の資料にも入っておりますけれども、この技術者はしばしばフラストレーションを感じると、大学で利用されているICTには限度があるからフラストレーションを感じるということでもありますので、もう既にかなり進んでいる人たちに

ICT のサポートを提供するというニーズもありますし、また、一方 ICT に関してはナイーブな段階にある人たちがいるわけでもあります。ですから、基本的なスキルでの研修を行うということもありますけれども、それ以上にテクノロジーを本当に付加価値のある教育法に展開していくということが重要ではないかと思います。いくつかコメントが出てきたと思います。やはりこの教育学がテクノロジーを牽引して行かなければいけないということも言われておりました。この意味するところはその教員が ICT のサポートの発展をサポートするべきだということです。彼らの方がいろいろな課題を設定するべきだと思います、大学レベルで。そして、もっと個人あるいはチームレベルでFDのスタッフと協力をし、そしてその技術的な専門的知識を持っている人たちと共に教授学習を改善していく必要があると思います。具体的な例も申し上げることができますけれども、これは後の皆さん方との懇親の時にでもお話できればと思います。

## 質問2

ICT を活用することを望まない教員、つまり ICT 活用に対して抵抗をしている教員に対するサポートの方法として何か良い方法がありませんか？

## 答え

まさに私が言わんとしているポイントなんですけれども、場合によりましては抵抗というのが正当化されている場合もあるんです。例えば、初期の段階の ICT の利用ということで、高等教育での導入はプログラミング化された学習ということで、学生がプラグインして教育を受けるということで、このような種類の ICT というのはやはりそのインタラクティブ性のというのが無かったわけですね。その方向性というのがなかったわけでありまして。これはディープラーニングではなくサーフェスラーニングと表面的な学習だったわけです。そしてこれに対して抵抗した教員というのは正当化できているんですよね。このような ? がある場合はそれを解消したくないと思っているわけです。不適切なテクノロジーに対する抵抗というものをあえて乗り越える必要はないと思います。そして完全にこういった抵抗を完璧になくすというのは、そこに関与している人たちとお互いに相談し合うということ、ニーズが何であるかを知ること、彼らの問題が何であるかを理解すること。これはアクションリサーチのような形の FD だと思います。ですから、まず、課題が何であるかを見る、その教授学習のインターフェースが何であるかということを見ていくということだと思います。場合によっては技術的な専門知識を持っている人たち、そして新しいテクノロジーを知っているということ、そしてそれらによりまして教授学習が改善されるというそういった人たちはこういったスタッフと協力して、そして新しい形の教授学習を導入することができると思います。ですから私にとってそういう形でプロセスが行われているということであるならば抵抗と言うプロセスはかなり無くなると思います。これが、中央で決定されてしまい、背後にテクノロジーが専門の人たちが決定し、そして資金面での点から効率性を高めるという意味で決定してしまうということであって、そしてそれが教員に強要されてしまうということになりますと、全く違った種類のものと言うことで抵抗が出て来るわけでありまして。しかしながらそれとは逆の方向でやったならばこういった問題が大幅になくなるのではないかと思います。

## Shin 先生への質問

発表の中でブランデッド？ラーニングのタイプ1とタイプ2というものがありましたが、タイプ1とタイプ2はそれぞれどのような科目に適していると思いますか？そしてそれぞれのタイプの大きな違いは何ですか？

## 答え

タイプ2は基本的にはオンライン教育で対面の教室の講義が補完的な役割を果たしています。ですからオンラインが主な活動です。タイプ2はタイプ1の？的な対面の教育でオンラインは補完的です。Sookmyung の例にありましたように e クラスシステムと言うのが補完的なオンラインのシステムです。私も同じような e クラスシステムを私の大学で使っています。講座をスタートすると自動的にオンラインシステムにログインできます。クリックしていくとオンラインシステムで全部の機能と考えることができますので、また学生に関する情報、写真とかアドレスとか、前にどういった講義を取っていたかとか、という学生の情報も全部オンライン講座について見るすることができます。対面の授業、普通の講義の時もこの要素がオンラインの活動がそれに追加されますので、ですから前に学生に言い忘れたことがあった時には、そのメモをオンラインクラスに入れることができます。そして学生は時々オンラインクラスを見て先生が書いたコメントとかクラスについての何か発表事項などがわかるわけです。また、学生に努力するようにと伝えることもできます。非常に便利なツールです。対面式の講義を補完するものです。学生は学習？が少ないと低いと言われてはいますが、その問題を乗り越えるためにオンラインシステムを使用しました。非常におとなしくて教室で発言しないような学生でもオンラインでは積極的に発言するという学生もいるようです。学生はアイデアをオンラインで共有しがります。したがって教室での雰囲気もそれによって変わります。更に重要なのは学生は教室に来ることが先ず大事です。ビデオセッションはあっても。ですから対面式の講義も続けることが大事だと思います。タイプ2というのはオンラインをやることで、この教育とか学習の活動を豊かにできます。でタイプ2をクリックしてシステムを開いて全部の機能がわかりますので教員としては面倒なことをやる必要はありません。そういったことで問題を乗り越えることができます。それから、出席できなかった分を補完するという意味で使います。

#### 司会者

残り時間が5分ほどですので、最後となりましたが、最後の閉め方として、それぞれの先生に1分間の時間の中で今回のシンポジウムで第1セッション第2セッションも含めて、いろんなエリア、いろんな経験がここで交流されたと思いますが、午前中の基調講演の Moore 先生から、シンプルなどころからFDをやっていくというのは非常に効果的で、明るい先生を集めてFDをやっていく経験を広めていくことが有効であるというお話がありました。そして Shin 先生から、FDはシンプルな、そしてわりと普及しやすいところから始まるということで、それぞれの先生方経験では高等教育における教員のIT活用における教育力向上においては、つまりFDの経験で大切なもの、効果的なものに何があるかを最後の時間で教えていただきたいのですが、FDにおいては効果的なものそして大切なものは何かということそれぞれの先生から1分間でお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

#### 中島先生

IT, ICTこれは楽しくなければなりません。退屈であったら時間もとるし、お金もとるし、退屈であったらこれは誰も使ってくれないので。FDも同様です。楽しくなければなりません。それが重要なところ。私は経済学者ですけども、パレートの法則というのをだいたい使うんですけども。パレートの法則よりも日本人が優れているのは、そこには御神輿の法則というのを考えておられて、御神輿というのは2割:6割:2割です。一生懸命に担いでいるのは2割、担いでいるふりをしているのは6割、最後の2割は何をしているかというぶら下がっています。先ほども出ていましたがFDをやりたい先生がいますが、IT、コンピュータを使った授業なんてやりたい先生はもっと多いです。御神輿の法則からいうと、ものすごく声を大きくして私の授業は世界一で黒板とチョークさえあれば何もいらんだという先生方というのはだいたい2割ですので、その先生方にエネルギーを注ぐと気分も滅入りますし楽しくないので、そういった先生方は頑張ってください、最初の2割、Anneが言ったみたいに、本当に

happy で friendly で nice people が2割、それで残りの6割を2割の方に引っ張っていくというのが多分戦略ではないかというふうに思っています。

Shin 先生

抵抗についてなんですけれども、教員の抵抗というのは技術に対する抵抗ではないと思うんですね。自分たちの教育スタイルを変えることに対する抵抗だと思います。教授というのは自分はすべてを教えており？なぜ新しいことをやらなければいけないのかという抵抗だと思います。それに対してどう答えれば良いのでしょうか？また、もう一つ、皆達観的に考えています。インタビューすると皆良い教師、良い教育者になりたいと言います。その方向で刺激を与えればみんな自分の教育スタイルを考え直すと思います。そうすれば IT の利用をアドバイスできると思います。便利な利用価値のあるツールとして提案できると思います。

Hannan 先生

繰り返しになるかもしれませんが、私の提案していますのは我々は先ず本当にその教員からスタートしなければいけないと思います。教員のニーズを理解し、そして教員に対しまして ICT がどういう形で彼らに使ってもらえるか、そして我々がサポートし、改善をしていかなければいけないと思います。

Kanuka 先生

最も重要なのは、私の経験から言いますと、これは強調しすぎることはできない、もう既に何度も言ったんですが、教育学はこれは技術を推進しなければならないと言うことです。それからもう一つ経験から言えるのは技術がすべてが教育学上効果的では無いと言うことなんです。各教員の目的によってそれは異なってくると言うことなんです。私の分野ではこれは私も理解に時間がかかったんですが、技術によっては技術者、ソフトウェアプログラマー、エンジニアなどによってつくられることがあります、その作った人、そこにはソフトウェアがどのように使われるかという目的意図がこもっているのです。これは常に教員の目的あるいは目標と一貫しているわけではありません、必ずしも。これは一つ私が10年間の長い期間かかって理解したことです。もう一つ申し上げたいのはこの高等教育においては高次の複雑な考え方、スキルを身につけて欲しいわけです。対面のクラス、これも技術の入ったクラスと何も違いはないと思います。学生に高次に移行してもらうのは非常に難しいものであります。これをどのような形で技術を使っても使わなくても抵抗もあるし、？。ですから一番良い答えはコンテンツ次第だと言うことです。それから学生の水準、一年生なのか、4年生なのかあるいは大学院生なのかによって変わってきます。いろいろな要素で変わってきます。効果的な e ラーニングをやるためには、私の経験からはコミュニティーを構成して経験を共有してもらおうと言うことです。それからこの明るい人と言うことですが、本当にこの人はキーパーソンになります。私の機関では、その明るさというのは本当に役立ちます。もっと良いのはそのチャンピオンが尊敬される研究者であると言うことです。これが国際的、海外的にも尊敬を集める人だと言うことですね。いい人であると共に尊敬の念をもたれるような人物であるということ、その人がチャンピオンになればもうこれはすばらしいと。

司会者

このセッションのディスカッションの結果としては教員のニーズに応えられる FD が大切ではないかというキーワードになるのではないかと思います。長時間この第2セッションに協力いただきまして、講師の先生方そしてフロアの先生方ありがとうございました。